

この夏、酷暑が続く中、テレビでは終戦日前後に戦争の惨禍を振り返る番組が放映されていた。心に残る場面や、考えさせられる内容が多かったが、中でも原爆投下を受けた広島を舞台にした映画は重いものであった。映画の原作については、以前、本で読んだことがあり、所々読んだ記憶がよみがえったが、ほとんど新たな作品として見ている自分がいたように思われる。自分が被曝したらその後、どうしたのだろうか、否、どうできたのだろうか？ そう考える力や体力、命すら失われていた可能性が大きい。もし、生き残れたとして、あの状態で、命を長らえる事はとても大変だっただろうと思われた。

本を読み、記録映像を見、長崎の原爆資料館を見学し、とそれなりに原爆とその被害を学んだつもりだったが、過去の、自分ではない他の人々に起きた悲惨な出来事として考えていたのではないだろうか。「自分がその立場にならなくて」とはよく言われる言葉だが、それはそう簡単にできる事ではないと思われる。今回、被曝体験がテーマの映画で、ある程度じっくりと被曝を映像という限定つきだが追体験出来たことで、はじめて、自分だったら、と思う事が出来たように思われる。

被曝と平和

どうしたら、他人事ではなく、自分の問題として考えられるのか、という問いの答えは簡単には出せないが、こうした映画の持つ力も大きいのではないかと感じられた。また、さらに強く思ったのはこうした残酷な体験をしなくて済む世界にではなくては、という事である。私たちは原爆の被害もあり、戦後、憲法で戦力を放棄し、戦争をしないことを謳っている。それは大きなことだが、「戦争のない世界」は戦争に至らない状況を作る不断の努力なしには実現が難しいように思われる。戦争の過程で日本では対戦国や国際状況への無知や理解不足、兵士や市民の人権軽視が横行していた。戦後、人権尊重や教育の普及は一定進むも課題も残されている。さらに、グローバル化の進む中、世界各地の文化や習俗への理解や交流、国際協力や外交努力は十分なされていないのか、と問えば課題が大きいのではないだろうか。もちろん前進面も多々ある。政府のみならず私たち一人ひとりにも戦争に至らないような社会をつくる役割がある。平和を願うとはそういうことではないか、と思う一夜だった。

■問い合わせ

人権啓発広報委員会

☎ 880・6569